

視座

文・荒木篤実

(バクサヴィア創業パートナー)



あらかき・あつみ ●日産自動車勤務を経て、アラン（現在のペルトラ）創業。18年1月から現職。マーケティングとITビジネスのスペシャリスト。ITを駆使し、日本含む世界の地場産業活性化を目指す実業家。

伝統と変革

今年も数々の反省とともに新たな年の決意の準備をする、そんな季節がやってきた。どのように生きていくのがよいのか、この歳になっても悩む日々である。今年お世話になった方々の顔を思い浮かべつつ、来年のテーマを考える際、その鍵として、伝統を守る生き方、変革を成し遂げる生き方、これらの間にはどういった違いがあるのかを考察してみることで、新機軸を見いだせないかと考えていた。

まず、伝統を重んじるタイプの人・企業に共通する生き方としては、内部で守られてきたしきたりや規則を遵守し、それを後代に伝授しつつ、その価値の継続を求めるとというのが一般的。地方都市に多いケースで、老舗のお店、のれんで商売をする事業者がこれらに当たると思う。

一方で新しく事業を興した人・企業の生き方を見ると、1つをやり終えると成功・失敗にかかわらず、次へ次へと新しい事業へ移っていくケースが珍しくない。東京・大阪といった大都市によく見られるケースで、最近はやりのシェアオフィスが多いのも大都市の特徴である。

さて、長い目でみた場合、一体どちらがより良い生き方なのだろう。ふとそんなことを考えていた際、とても含蓄ある言葉を教えてくれた方がいたので紹介したい。

その方は、日本仏教の母山といわれる比叡山延暦寺の重鎮である。たまたま仕事でお付き合いをさせていただくようになり、延暦寺の伝統についてお尋ねしたとき、次のような答えが返ってきた。「伝統という文字は、かつては“伝灯”すなわち“灯を伝える”と書いたそうです」と。なるほど、灯を絶やさないとすることは、電気のない時代には、大変大事なことだったのだろうと思った。

「ですが、時代によって物事はさまざまに変わっ

ていくため、同じやり方に固執していたのでは“伝灯”を守れない。したがって延暦寺では1200年の間、ただの一度もその火が途絶えたことのない不滅の灯があるのですが、その担当というのはただの1人もいなかったのです」

驚いた。担当がいらない？決まってない？いや、決めないのだそう。それが延暦寺流の伝統。なぜかと聞くと「担当を決めてしまうと逆に柔軟性に欠けてしまうのです」という。その人が休んだらどうなる、2番目の担当が同時に休んだら、とルールのためのルール作りをせねばならなくなる。そこで、常に気づいた人が灯を絶やさぬよう、全員が気をかけて伝教大師（最澄）さまの火をお守りする。これが延暦寺の伝統となったということだ。

これを聞いた時、日本にはなんと素晴らしい思想があるのだと今年一番の感動を覚えた。真逆がマクドナルドなど欧米由来の事細かなマニュアル方式。それは恐らく、必ずしも全員が心を込めて仕事ができる環境とは限らない、そういう現代の効率重視の経済・社会にあっては悪い仕組みでないが、手段が目的となってしまうがちで、ゆえに日頃サービス業で心のこもった笑顔を見ることはまれなのだとなつた。

訪日時は地方都市を営業でまわる機会が増え、身内だけで閉鎖的になりがちな伝統業の事業者の方々にどうやって目を外に向けていただくか、「世界はもうこうなっているのです」と説得する日々であった。が、延暦寺での話は実に含蓄があり、「変わり続けること、それがすなわち伝統を守ることなのです」と最近では使わせていただいている。

ぜひ皆さまも一度比叡山に足を運んでいただき、日本の仏教の奥深さ、宗教というより哲学としての深みを感じていただけたらと思う。

(次回は2月3日号に掲載します)